

「一流になりなさい。それには、一流だと思い込むことだ」という本からです

予算をもたせると目先しか見えなくなる。だから予算は嫌いだ

予算制度も、同じく船井先生はあまり好きではなかったようです。一度、一緒に移動中、こんなことをいう先生に、思わず吹き出してしまいました。「予算なんてないほうがいいよ。みんなが可能な限り、できる限りの数字をやればいいんだ。そして積み上げたら、凄い結果になっている。それが一番だよ」

青天井、ですね？そう尋ねると、うんうんとうなずきながら言うのです。「人間はね、目に見えるものに縛られる。予算を決めるだろう、すると予算しか目に入らない。いい仕事をしていれば、予算は自然と達成する。そんな当たり前のこともみえなくなるんだ」

予算達成は結果に過ぎない。日々の仕事をする目的は、よい仕事をしてお客様に喜んでいただくことだ。その一点をとにかく、大切にするんだよ。確かにそう伝えても、顔はうなずいていても、目は予算をしっかりと見ている状況が起こります。人間は目に見えないものごとを軽んじ、目に見えるものに影響を受けるものなのです。「予算は決めた時点での、自分たちの成長予測だよと、現場によく伝えます。達成できないのは、自分が予測ほど伸びていない、と考えなさいと話をするんです」うん、そうだな。人間は縛られると楽しくなるものだ。自由が一番なんだ。予算も同じことだよな。船井先生のつぶやきが、少し寂しそうでした。「目先はとても大事です。目先のことを適当にしている、よい未来は来ないですよ。でも、未来はもっと大事です。未来のためのいま、そう考えて行動して欲しい」会議の場で、よく語られる言葉です。

目先も大事。でも未来のためのいまだと、確信をもって行動しなさいとの言葉は、社員規模が 300 人から 400 人に向かおうとする船井総研社員に、再三語られた言葉です。司馬遼太郎氏は、『竜馬がゆく』で国民的英雄へと知らしめた坂本竜馬の生き方を称して、「彼が一生をかけて伝えたかったのは、遠くを見よ、ということではなかったか？」と生前書いています。遠くを見よ。人間が生きる上で日常の些事、煩わしい作法にとらわれることは、いたし方ありません。

船井幸雄は、とにかく些事をきちんと、する人間でした。私たちにも、些事をしっかりできなければ、いい未来には辿り着かないぞ、といつも伝えてくれました。しかし、心と目線は、未来をしっかり見据えておくのだぞとも、伝えているのです。遠くを見よと、いつも言っていたのだと思うのです。短期の楽観。長期の悲観。これは、いまの世の中を覆っている病だと思えます。家庭、企業、地域、国、地球。すべてが、短期楽観、長期悲観のなかにいて、そのことに目をつむっているのではないかと思うのです。本来、リーダーは逆の発想をもち、伝えてゆく人でなければと思います。

短期悲観、長期楽観の視線です。「いまは些事を怠ることなく、厳しいことにも手をつけなくてはいけない。それは、こんな理想的未来のためなのだ」そう伝えながら、いまを乗り越え、素晴らしい未来へと近づいていくべきなのですが、いまの厳しさには、フタをしてしまいがちです。目先に追われると、短期楽観病にかかってしまうケースが多いようです。とくに予算、数値に追われれば、いま未来のために何をすべきかと、考える余裕もなくなりがちです。「目先は大切。でも未来はもっと大事」そう考える船井先生が、予算は嫌いだ、と語る気持ちが、理解できるのです。

目先に追われるとどんな病気になりますか？

()

会議の場でよく語られた言葉なんですか？

()